

ellipse

[エリプス]

楕円(ellipse)には焦点がふたつあります。男性中心の社会から、女性と男性がそれぞれに中心(焦点)となる社会を目指すという思いを込めて、誌名を「エリプス」と名づけました。

特定非営利活動法人お茶の水学術事業会 理事長交代のご挨拶

TOPICS

お茶の水学術事業会の歴史を振り返る(上)

—お茶の水学術事業会を設立した頃のこと—



ワ・タ・シ

深津千鶴 FUKATSU, Chizu イラストレーター
東京生まれ。1988年、お茶の水女子大学文教育学部地理学科卒業。在学中に、『週刊朝日』誌上にて「山藤章二の似顔絵塾」特待生となる。広告代理店勤務を経て、1990年より作家活動を開始。書籍装画、CDジャケットなど多く手がける一方、エッセイ執筆、壁画制作などの活動を展開している。



特定非営利活動法人
お茶の水学術事業会

REPORT

夢のつばさ♥プロジェクトニュース
中村蒼玉 歌舞伎ワークショップ

INFORMATION

イベント情報
事務局よりお知らせ

イベント参加レポート

中村蒼玉 歌舞伎ワークショップ

主催：お茶の水女子大学「伝統芸能×未来」プロジェクト

開催日時：2024年8月3日（土）13:00～14:30
 会場：お茶の水女子大学 国際交流留学生プラザ3階
 講師：中村蒼玉氏（歌舞伎俳優） 山崎 徹氏（歌舞伎付け打ち）
 司会・進行：埋忠美沙氏（お茶の水女子大学コンピテンシー育成開発
 研究所 准教授）
 参加人数：25名



2年前に同プロジェクトが主催したトークイベント「中村蒼玉と歌舞伎」（2022年12月17日）に参加し、蒼玉氏の歌舞伎に対する情熱、理解度、真摯な姿勢、そして何よりその美しさに感銘を受けた歌舞伎鑑賞歴60年の私は、今回もポスターを見つけるなり即参加の申し込みをしました。今回はトークだけでなくワークショップもあるとのこと、期待も込めて着物で参加です。

早めに会場に着いたところ、ガラんとした室内には付け打ちの道具が4～5セットも置かれています。これはもしかして付け打ちメインのワークショップかな???

早めに会場に着いたところ、ガラんとした室内には付け打ちの道具が4～5セットも置かれています。これはもしかして付け打ちメインのワークショップかな???

まず会場に現れたのは付け打ちの山崎氏。道具をセットされ、その側で付け打ちの衣装である裁着袴（たっつけばかま 膝から下が細くぴったりした袴）に着替えられたのですが、その様子が粋で、近頃殆ど死語になったかとさえ思う“行儀の良さ”を感じさせてくれました。初っ端から古典芸能万歳！です。

やがて、時間になり蒼玉氏、司会・進行の埋忠先生も登場して、ワークショップが始まりました。参加者の多くは若い方（大学生・大学院生・附属校生徒）で、皆さんラフな格好なので、勇んで着物で参加した身としてはやや拍子抜けし、埋忠先生に「皆さん着物を着て参加されるのかと思っていました」と申し上げたところ、「参加ハードルを下げようと思って」とのお返事。確かに和物に対する馴染みの薄いであろう若い人たちが、こうした本格的な和の催しに参加して、どのような対応をし、変化していくのかということにも興味がありましたし、良い影響を受けていただきたいと思っていたので、主催者の心遣いに感心しました。

歌舞伎好きとしては、付け打ちは見慣れたもので、正直、「なぜ、この期に及んで付け打ち?」と思わなくもなかったの

ですが、どうしてどうして、改めてその歴史、道具、技について説明を聞いてみると、知らないことだらけ。目から鱗、お恥ずかしい限りでした。この段階ですでに参加して花丸の気持ちです。

付け打ちは歌舞伎の舞台上手（かみて 舞台に向かって右手）端の幕際に座り、木の板面に拍子木のような木の道具を両手で打ち付け、役者が見得を切る時、走る時、転ぶ時、物を投げた時などに音を出す演出法です。同じく木と木の当たる拍子木とは全く異なる「バタバタ」という大きな音で、音程もなく、強弱と“間”といわれるリズムに近いものだけで、歌舞伎の演出を強調させるのですが、この抽象性が歌舞伎の持つリアルさと絡み合って舞台の深みが増しているような気がしました。

実は、よく聞いていると、付け打ちの音は、必ずしも所作とピッタリ合うのではなく、時として微妙にズれるのですが、このズレ、揺らぎこそが、“間は魔物”と言われるような、歌舞伎の独特の面白味につながるのではないかと思います。参加者の中に音楽の先生がいらしたので、洋楽のリズムと邦楽の間についてお尋ねしたら、「全く違うもので、和のものは難しい」とおっしゃっていました。



説明に続いて、参加者の方々の実演です。数人の方が、実際に付け打ちに挑戦されました。皆さん初めてとは思えない飲み込みの良さ！積極性も二重丸。さらに蒼玉氏と参加者の所作（動作）と付け打ちのコラボでは、皆さん洋服姿であるにも関わらず、膝を曲げ、袖を合わせて見事に演じられました。和の所作の面白さを分かっていただけでしょうか。

このような催しを通して日本の伝統芸能の面白さが広く伝わっていくことを願っています。

（お茶の水学術事業会 古庄洋子）

「伝統芸能×未来」プロジェクト（Japanese Performing Arts for the Future (JPAF)）では、「日本を知り、世界へ歩む」ために、そして「過去を知り、未来を切り開く」ために——若者たちが日本の伝統芸能と出会い、学ぶための、魅力的なイベントを企画・開催しています。HPもぜひご覧ください。
<https://www.cf.ocha.ac.jp/dentogeino/>